

# 研究通信

No.32

1959.6発行  
村落社会研究会  
事務局

東京都文京区小石川町  
1の1  
中央大学文学部  
社会学研究室内

## 今年度の共通課題に対する期待

(福島) 菅野正

村研の今年度の共通課題が「村落と政治体制」となったことに、私は大きな期待と喜びを感じています。というのは、これが單に私の興味をひくテーマであるからというだけでなく、從来の「村落共同体」研究が、この辺で、これと関連する特殊テーマを掘り下げるこことによつて、逆に見なされなければならない時期にきているのではないかと感じていたからです。というのは、今迄は村落共同体の構造的分析に焦点がおかれてきて、ややもすると、共同体と外部社会との機能的関係、およびその関係が共同体内部の構造と実質的に関連しあつている様相への分析が、手うすだつたようになじっていたからです。勿論、今までの数多い共同体研究がいま私が述べたような観点を無視して進められてきたものではないことはわかつてますが、しかしこの辺で、村研の「共通テーマ」として、特殊問題的視角から皆んなが一緒にムラの問題に接近することは、單にテーマの「村落と政治体制」の解明がなされるだけではなく、論争多き「共同体」概念の確立にも、却つて益するところ大なのではないかと考えているわけです。

といふことは、私は「村落共同体」の研究の重要な一側面として單に生産的に、ないしはその他の社会的諸関係において自立できない家相互の互助關係による地域的まとまりという視点のほかに、(それとともに)その隣接地域や上級権力との諸関係が理解されなければならぬと考えているからです。つまり、村落共同体は生産構造的な規定をうけて成立存続しているものであると同時に、本質的に政治的な規定をうけて成立存続していると考えます。このことは單に現在の村落についていえるだけでなしに、どれ程歴史を遡つても、程度は異にしますが、一般的に云えることだと考えています。(ちなみに私は、村落共同体を前近代的なものに限定したくはありません。その典型は前近代的社會にヨリ多く見出されたかも知れませんが、成立と維持の条件さえ整えばどこにでも、いつの時代にも現われるものと考えます。問題はその成立と維持の条件を機能の面から捉えるとともに、それが構造化される過程をとらえることだと思います。そのためには今迄の研究の共通の成果から「時仮の理想」としての「村落共同体」をつくり出して、これを手がかりとして現実を実証的に分析しながらヨリ高次の概念構成へ進む以外に方法がないと考えます。)終戦後とくに問題とされました「經濟外的強制」などいうことも、対立する他の地域的諸集団や上級権力との關係が、逆に強い共同体意識を醸成したり、あるいは強要したりした事實を見落すと、本態の半分しか理解できないことになるのではないかでしょうか。要するに私は、村落共同体を構成する重要な因子たる地域性(機能の面をとくに強調して村落共同体を社会関係ないしは共同組織そのものとみる経済学の方々からは異論があるかも知れませんが)、家相互の生活上の互助關係、共同体意識の何れもが、生産構造と政治体制(共同体内部の権力構造およびその外部の権力構造との関連)とによつて規定されていると考えたいわけです。

この場合、生産關係的なものと政治的なものとが、現実ではほとんど区別がつかず、どこまでを生産關係的と見、どこからを政治的と見るかはきわめて困難な問題であることを、あらかじめ承知しておかなければならぬと思います。とくに村落内の自治機構と上級

権力との媒介の役を果たすムラのボスが、大ていは地主や船主や有力本家などであるために、また村落ではほとんど生業が同質的であるために、両者の区別がますますつかなくなっているのが現実だと思ひます。そしてまたこの不可分なところにこそ、都市とは違った社会的諸関係の同一地域への累積という村落共同体特有の濃密性がでてもくるのでしょうか。しかし方法的にはやはりこの両者は別箇なる視角として区別され、そして区別された後に統合されねばならないものと思ひます。

この場合、非常に概略的に云つて、直接オーナメントの意味での生産的な關係（地主・小作關係、船主・船子關係、水の共同利用關係、共有山關係など）と、何等かの「正当性」（政治の構造原理）による支配・服従關係との二つの視角を準備して、この対応關係を捉えることが大切だと思います。この二つの關係が相互に適合していく一貫的とらえられる村落、その内に何等かの元老らしきものがあつて両者を媒介している何ものかの存在している村落、さらには全く上下の身分的ハイラーキーによつて組織されている村落やケセツセンシヤフトリツヒに組織されている村落等々、村落共同体の類型は生産關係と権力關係との対応關係をとらえたことによつて、もつとも明確化すると言えます。

それから、もう一つ、村落外の社会。とくに村落外の権力との關係が注目されねばならないことは云うまでもありません。共同体の範囲と意識とその輪郭の明確度は、私は、一方では内部での生産關係を中心とする生活的互助關係の緊密さと、他方では外部権力との關係（外部への対抗や外部権力の強制など）の函数だと考えていました。典型的には戦時中の隣接などが考えられます。それ程でなくとも、封建時代ならば犯罪や租税などの關係で単位下部組織の組成に利害をもつた上級権力が存在したこととはあきらかでし、現在でも納稅組合や慶賀の単位組織、町村合併によつて大規模化した町村政の必要不可欠な単位下部組織等々、実は村落共同体を上から規定する方が、いつも存在しています。勿論それが独自で村落共同体を成立存続させる力たりうることは、ますないとみて差支えないで

しよう。しかしそれはつねに既存の生活共同態に対しても生きかける重要な要素であり、やがてそれは内部の構造それ自体のなかにくいこんでその要素となる性質のものだと思います。この意味では村落共同体に政治的な人為性はつきものであつて、往々の一員はその概念やマキーヴィーの「コミュニティ」の概念には（理想型とも）場合でも「理想的純型」たることをやめて「歴史的典型」たるためには見なおさるべき面をもつてゐるのではないか。とにかく、村落共同体は孤立した自足的な生活共同体としてばかりではなく、全体社会の構造との結びつき（当然、そのムラムラによつて異なる特殊な結びつきと、全体社会の要請によつて生ずる一般的な結びつき）を、その生産關係とともに（と云うことは総合的に）とらえてゆくことが要請されると思います。このような場合、私は、日本の村落ではムラのボス（指導者、有力者）の性格と機能をとらえることが、戦略的にみて一番有効だと考えていて、村落と全体社会との長所と短所、すなわち性格のほとんどすべてがここに結集し、ここを通路として機能してゐるようと思えたからです。これは個々の具体的な事例、例えば町村合併の進行過程やこの度の選挙などについてみてゆくなれば、一応はすぐわかることがあります。とりとめもないことを書き立てて、これと云つた結論もないのですが、要するにいま私の頭のなかにあるのは、村落共同体の研究にはもう少し政治的な視角が準備されてもよいのではないかということ、それは生産關係的視角と相即的に一方では共同体内部の権力構造に着目し、他方ではこれに影響を及ぼす上級権力との關係が共同体の重要な一面として追求されねばならないのではないかということ、あるいは極めて当然で常識的なことかも知れません）。だから今年の村研の共通課題には特に大きな期待をもつてゐるのですが、然し村研の課題の意味するものが私の考へとは相異離れていて、今迄思いつきのままに述べてきたことが私個人の課題に対する期待的幻影であつたりするのではないかとも思われます。然しともかくこのような思いつきに対す（以下三頁（十段）へ）

(二頁下段よりつづく)る方法的摸索への有効な効果を、私は今年の村研の大会に大いに期待しています。